

西洋と日本の城・比較と検証

講師 西野博道

日本の城郭は、歴史的に、古代より朝鮮や中国の城に影響を受けて発達し、文禄・慶長の役における実戦経験を経て、近世城郭の最高傑作を多数生み出した。しかし、それ以前、つまり、鉄砲伝来以後、日本の城は明らかに西洋城郭の影響を強く受け、発達したことを見落としてはならない(特に、キリシタン大名の築いた城は大変興味深く、重要)。

1. 鉄砲・火薬兵器と城郭の関係
2. 赤徳城の縄張りとお五稜郭、山鹿素行、大石内蔵助の屋敷と大手門の位置
3. 城郭ネットワークで関東支配を成功させた小田原北条家の本音(ノルマン・コンクエスト及びエドワード1世のウエールズ征服との共通点)
4. 信玄の築城哲学と16世紀以降の西洋城郭史の関係
5. 福岡城本丸と天守台の位置関係、および、上山城天守の位置→キープ・ゲイトハウス
6. 藤堂高虎の好んだ犬走りとコンセントリック型城郭の基本的構造
7. 駿府城の縄張り(輪郭式)とコンセントリック型城郭
9. 天守の無い城は西洋において、最先端の城郭形式→徳川大坂城本丸を囲んだ多聞櫓と3層櫓(天守規模)11基、あるいは仙台城本丸に並んだ4基の天守規模の3層櫓の雄姿は、同型のタワーを幕壁に等間隔で並べる、13世紀以降の西洋城郭の主流。
10. 総構えの城(日本)と城郭都市(西洋)
11. マナーハウスと陣屋の類似点
12. 安土城天主(5層7階)の一部は八角形→デル・モンテ城(イタリア)の影響か?

13. 秀吉は黒色の城、家康は白い城といわれるが、白色の城は王城であり、白は、西洋においては平和の象徴

西洋城郭用語解説

カースル(castle) 城を意味する代表的な英語。要塞化された国王や貴族の宮殿・邸宅。

ラテン語(castell, castellum)が語源。中世英国ではcastelと綴られた。スペイン語で城はCastillo,

イタリア語ではCastello, ポルトガル語でCastelo、オランダ語ではKasteel

シャトー(château) フランス語で城の意味。城郭のほかに、宮殿、邸宅などの意味も表す。語源はcastleと同じで、特に城郭の意味ではchâteau fortと表すこともある。

ブルク(Burg) ドイツ語で城の意味。特に、中世城砦、城郭を示し、山城、丘城、水城である。本来、物見塔(watchtower)の意味を表し、ラテン語(burgus)が語源。港町ハンブルク(Hamburg)はBurg of Ham つまり Castle of the bayの意味。シュロス(Schloß)やレジデンス、レジゼンス(Residenz)も城。シュロスは丘城、平城、宮殿を表す。レジデンスはドイツを訪れる観光客には城と紹介されるが、正しくは、16世紀、17世紀に築かれた宮殿や豪邸。

フォート(fort) 砦、要塞。cf. fortress (大規模な軍事要塞), hillfort, Roman fort.

フォーティフィケーションズ(fortifications) 防備施設、防御設備、軍事要塞。

ブルグ、バラ(burh, burg, burgh, brough, borough) 要塞化された村落。城郭都市、自治都市。

モット&ベイリー型城郭(motte and bailey castle) ノルマン様式の城。

コンセントリック型城郭(concentric castle) 輪郭式、円郭式、囲郭式の城。

タワー・ハウス(tower house, peel, pele) スコットランドの代表的な城。

ベイリー(bailey) 城の曲輪、郭。

ウォード(ward) 丸、郭。

バービカン(barbican) 馬出し。またバービカンに築かれた建物自体を呼ぶこともある。

モート(moat) 城を囲む広大な水堀。空堀にはディッチ(ditch)を用いる。

サリーポート (sallyport=postern) 搦め手。抜け穴。

キープ (keep) 天守。cf. square keep, rectangular keep, tower keep.

ドンジョン (donjon) キープの古称。フランス語で天守(キープ)の意味。

ベルクフリート (Bergfried) ドイツの城に備わる主塔(天守)。

タワー (tower) : 塔。天守。円塔、矩形塔、D型塔。なお小塔はタレット(turret)という。

シェル・キープ (shell keep) モット&ベイリー型城郭から発達したキープ。cf: round tower

ホール (hall) 広間、大広間 (great hall)

ゲイトハウス (gatehouse) 大手櫓門。cf: keep gatehouse

フォービルディング (forebuilding) 付け櫓。

ソーラー (solar=great chamber/chamber=private room) キープ最上層にある領主の寝室。

カーテン・ウォール (curtain wall) 幕壁。石造りの重厚で高さのある城壁。

シティ・ウォール (city wall) 市城壁。ゲイトハウスはシティ・ゲイトと呼ばれた。

ホーディング (hoarding) 張り出し歩廊。木製の石落とし。

マチコレイション (machicolation) 常設の石落とし(石造り)。

バトルメント (battlement) 胸壁。凹凸状となった城壁の上層部全体をいう。

ランパート (rampart) 城壁の墨壁部分。上部は兵士が通る「武者走り」となっている。

ループホール (loophole) キープなどの建造物に備えられた狭間・銃眼。

エンブレイジャー (embrasure) カーテン・ウォールなどの城壁に備えられた狭間・銃眼。

ドロブリッジ (drawbridge) 跳ね橋。引き上げ橋。

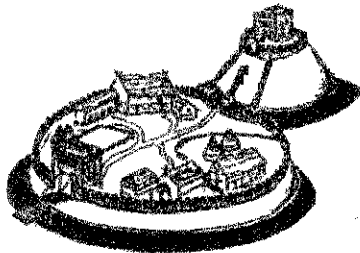
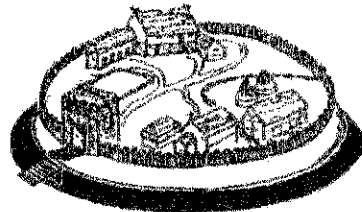
マダー・ホール (murder hole) 殺人者の穴、殺人孔。ゲイトハウスの天井に設けられた穴。

ポートカリス (portcullis) 落とし格子。吊るし門。木材と黒鉄で造られた格子の扉門。

コンスタブル (constable) 城代。

リングワークの城

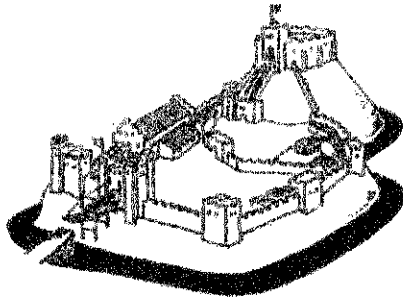
10世紀前後。空堀と木の柵で囲んだ円形の城。木製のゲートハウスが築かれ、城内には領主の館(ホール)、家来の住居、礼拝堂、キッチン、馬小屋、納屋、井戸などがあつた。



モット・アンド・ベイリー型の城
11世紀、イギリスを征服したウィリアム一世が、ノルマンディー地方よりイギリスに伝えた代表的な城。リングワークの外郭を見渡せるように、高く土盛りしたマウンドを造り、そこに木製のタワー(キープ)を築いた。

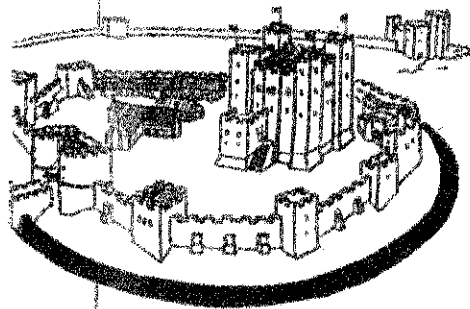
シェル・キープを有する石造りの城

木製のモット・アンド・ベイリー型の城は、早い時期より石造りに替えられた。その時、マウンド上の周囲は幕壁と呼ばれる石造りの高い胸壁で囲まれ、それ自体をキープとするシェル・キープが生まれた。



スクエア・キープを有する城

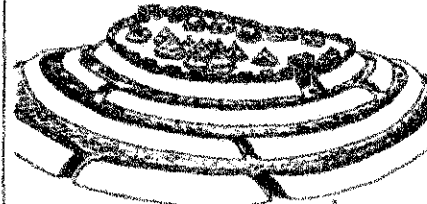
ノルマン人がフランスからもたらしたもう一つの城のスタイルであり、リングワークの城の城内にあるホールが石造りになったもの。イギリス征服当時、全国に急いで築いたモット・アンド・ベイリーの城は、実はスクエア・キープを有する城、つまりストーンキープ・アンド・ベイリー型の城の、経済的理由による簡略の城ともいえる。



イギリスの城の歴史

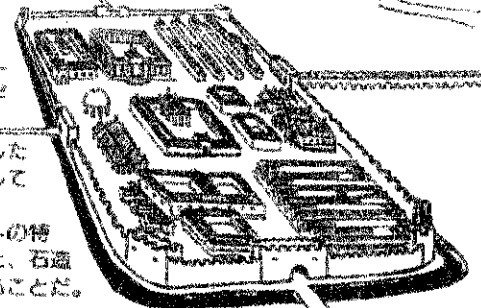
ヒルフォート

紀元前700-500年頃、ケルト系ブリトン人が住んでいた古代イギリス(鉄器時代)に現れた丘の上に築かれた砦。



ローマン・フォート

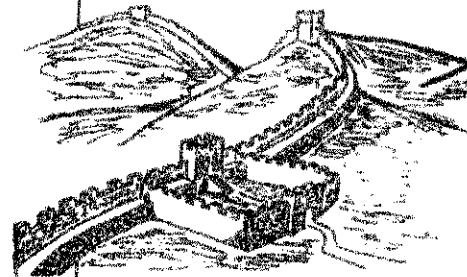
紀元前55年、カエサルによって始められたローマ軍のブリタニア(イギリス)征服に伴い、ローマ軍は占領した各地に軍の駐屯基地としてフォートを築いた。このローマン・フォートの特徴は形が矩形であること、石造りの本格的な城塞であることだ。



ヘイドリアヌス・ウォール

(ハドリアヌスの長城)

128年、ハドリアヌス帝がスコットランドから攻めてくるピクト人、スコット族の来襲に備え築いたもの。4メートルの高さの石造りの城壁が120キロも続き、ローマ人がイギリスに残した最大の遺跡。



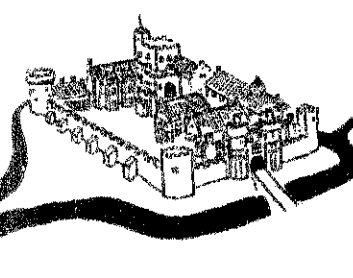
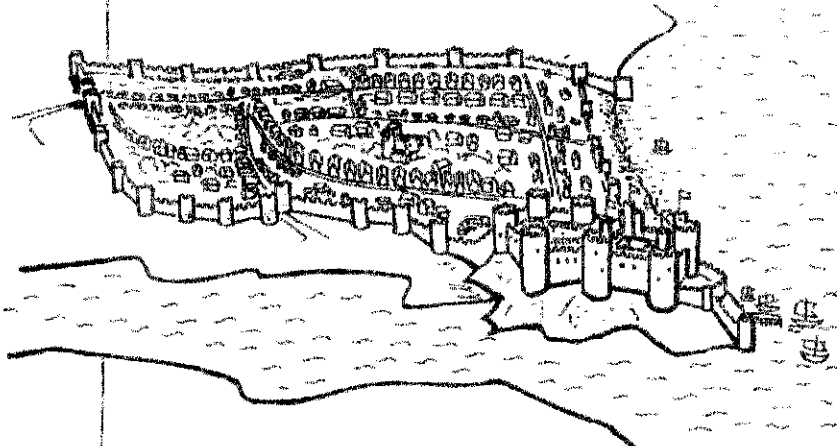
パール(サクソン・フォート)

ヨーロッパ北西ドイツ海岸地方から、ブリテン島にやってきたゲルマン民族のサクソン人とアングロ人が、7-8世紀頃築き製墓化した町。パール中央には天守をおもわせる石造りの教会があつた。



城塞都市の発達(コンウェイ城)

ウェールズにエドワード王が築いたことから発達した城塞都市は、その後イギリス全土に広がった。いわゆる総構えの城である。

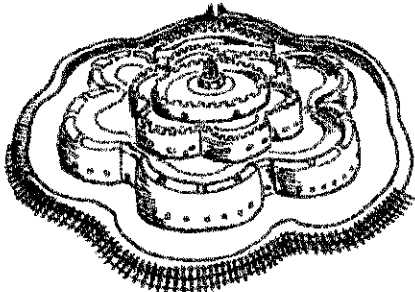


マナー・ハウス

王や貴族は城に住んでいたが、荘園領主はマナー・ハウス(manor house)に住んでいた。マナー・ハウスは次第に石造りの円塔や胸壁を有する建物となり、周囲には小さな塔が巡らされ、城に似せて建て替えられるものも多くなった。

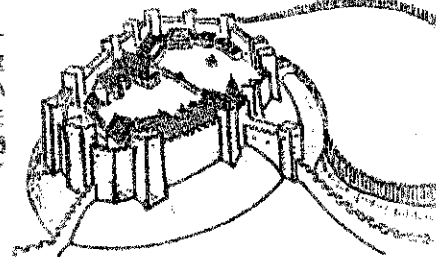
軍事要塞(ティール城)

16世紀、ヘンリー八世の時代にフランス、スペインなど外国からの来襲に備えて、海岸沿いに多くの軍事要塞が築かれた。「城」とはいうものの、王や貴族の住居設備はなく、軍人が常時警備にあっていた。



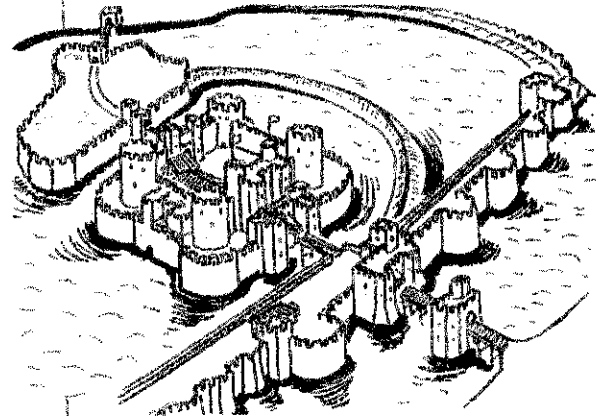
キーブのない城(ワラムリンガム城)

11世紀になると、シェル・キーブのようにマウンド周囲を幹壁で囲むだけでなく、もっと広い範囲でベイリー(郭内)全体を厚く高さのある幹壁で囲み、随所に壁土塁を備えた新しいタイプの城が現れた。



コンセントリック型の城(ケルア・ウー城)

エドワード一世の時代、十字軍遠征で学んだ築城術を縦横に転用して造られた数多くの名城が、ウェールズ地方に生まれた。この型の城は王の名前にちなんで、エドワード式城郭とも呼ばれている。



タワー・ハウス

14世紀、スコットランド、アイルランド、イングランド北部など治安状態がわりあい不安定な地域でピールとか、タワー・ハウスとか呼ばれる城のスクエア・キーブを模した、石造りの高床式住居が数多く現れた。タワー・ハウスは300年にわたって築かれ、その規模も形も多種多様である。

